

江陵 全国逃す

女子準決勝

札幌山の手に0-2

春高バレー道代表決定戦

【札幌】バレーボールの第67回全日本高校選手権大会(春高バレー)道代表決定戦(道バレーボール協会など主催)最終日は21日、道立総合体育センター(北海きたえーる)で男女の準決勝と決勝を行った。代表権の懸かった準決勝の女子は、第4シードの江陵(道協会推薦)が第1シードの

札幌山の手(同)に0-2で敗れ、初の全国大会出場はならなかった。江陵はライトの白幡朝香(3年)を中心に攻め、リベロの清水佳代主将(同)らも懸命にレシーブを上げたが及ばなかった。札幌山の手は道下ひなの(2年、帯七中出)はセンターで先発出場し、新川結菜(同、帯二中

下がる)と齊藤万衣(同、帯西陵中出)らが所属する第2シードの旭川実(道協会推薦)が、本間夕稀(同、更別中央中出)がレギュラーの札幌大谷(札幌1位)を2-1で下した。札幌山の手は3年ぶり、旭川実は3



【女子準決勝・江陵-札幌山の手】第2セット、江陵は④白幡朝香が11点目を決め、強豪相手に必死に食い下がる

年連続の全国切符。

(北雅貴、折原徹也)

出)と齊藤万衣(同、帯西陵中出)らが所属する第2シードの旭川実(道協会推薦)が、本間夕稀(同、更別中央中出)がレギュラーの札幌大谷(札幌1位)を2-1で下した。札幌山の手は3年ぶり、旭川実は3年連続の全国切符。

【女子】

▽準決勝

札幌山の手 2525
148 0 江陵

▽準々決勝

江陵 252325
22514 1 旭川大

(21日、関係分)

「打倒山の手」

かなわらず涙

4コートで熱戦が展開されてきたメーンアリーナに1面だけ作られた特設コート。2年ぶり2回目の舞台上立つ江陵は、全国高校総体（インターハイ）ベスト16の強敵に立ち向かった。

第1セットは札幌山の手の全日本ユース代表候補、橋井友香（3年）や舛田紗淑（2年）の強打と道下ひなの（同）の速攻などでリブスムがつかめず、一方的な展開に。白幡朝香は「相手のペースにのまなれ、思うようなプレーが全くできなかった」と反省。練習で培ったものを出し切ろうと臨んだ第2セットは、力強いスパイクやフェイントで得点した。佐藤慶香（3年）の速攻や、リベロの清水佳代、主将（同）の再三にわたる好レシーブ。

サブカットも安定し8-8と互角だったが、山の手の攻撃を防げず8連続失点と一気に走られた。清水主将は「山の手に勝つことだ

大舞台の夢 後輩に託す 江陵

3位入賞を果たした江陵



けを考えて練習してきたので悔しい。（相手は）スパイクの決定力

が高かった」と涙した。

6月の道高体連で4チームによる決勝リーグに進んだが、3戦全敗に終わった。1位の札幌山の手に勝つためポジションを入れ替えた。守りの良い清水主将をレフトからリベロに、センターの白幡をライトへ、172cmの黒田沙耶（1年）をセンターに抜てき。福田まどか監督は「小さくてもできる」ポリシーを持ち、161cmの清水をアタッカーとして起用し続けていたが、信念を変えてでも勝利にこだわった。

清水主将と中学時に帯広選抜の白幡、釧路選抜のセッターの小沼志帆（3年）を軸にチームづくりを進めてきた過程に間違いはない。ただ、「毎年4強に入つてこの独特の雰囲気味わわないと自分たちの力をフルに発揮できない」（福田監督）ことも痛感した。

清水主将は「後輩はこの悔しさと山の手プレーを忘れずに練習してほしい」と、かなわなかった全国の舞台を後輩に託した。